

お茶を通じて対話の場の促進を～新茶の季節が始まります～

桜が散り始めると、太平洋から吹き込んで来る南風が暖かさを増してきますと、牧之原台地一面に広がった茶畑に新芽が芽吹いてきます。この地域が一番キラキラと輝く、待ちに待った新茶の季節がやってきます。

静岡県は、日本のお茶の中心地で、生産量は日本一を誇ります。その静岡県で一番生産量が多いのが牧之原市です。



まもなく新茶の摘み取りが始まる牧之原の茶園

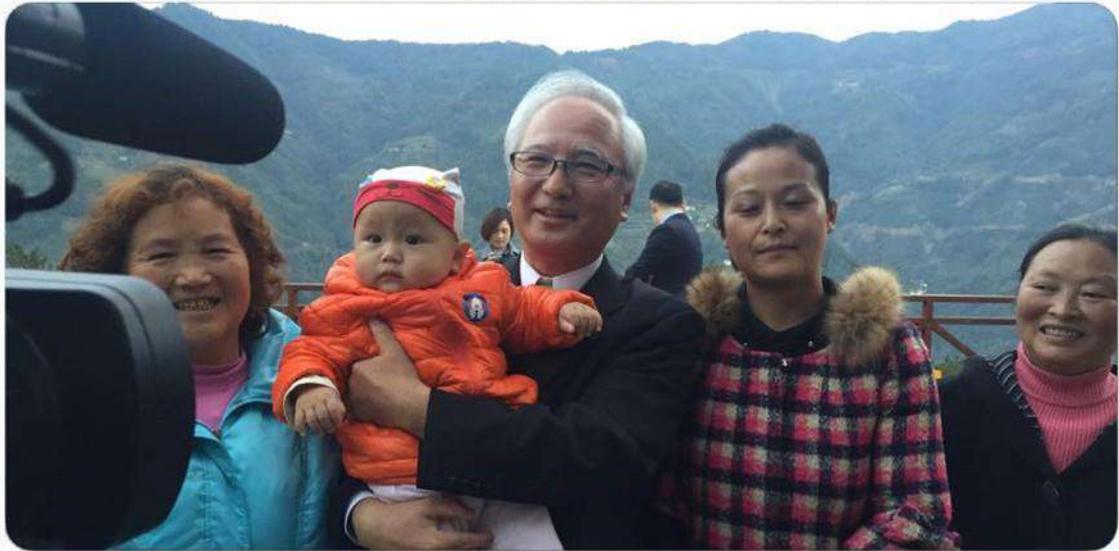
お茶は唐の時代に、遣唐使で中国に渡った最長や空海などの僧により、仏教などとともに日本に伝えられたと言われています。

その唐の時代の都は長安、現在の西安でした。

私は 2016 年 11 月、牧之原市の経済団体を伴って、陝西省安康市を訪問しました。「日本のお茶のルーツは(遣隋使や遣唐使によって)長安(現在の西安)から伝わった!」という事で、日本一のお茶の産地牧之原市と、陝西省のお茶の産地安康市との交流プロジェクトを華商報から提案されてのものでした。

長江の支流漢江の曲がりくねった川沿いの急峻な斜面にへばりつくように密集する安康市紫陽花県の街並みと、周辺の山々の頂に散在する茶園で出迎えてくれた農民の家族に、唐の時代から続く「経済と文化としてのお茶」のつながりを強く感じました。

その「お茶のご縁」によって、翌年には安康市の代表団が牧之原市を訪問し、2019 年 11 月には牧之原市と安康市が友好都市協定を結びました。



陝西省安康市紫陽花県の茶園で茶摘み歌を聴く。茶農家家族のお出迎え

宋の時代には栄西禅師が、浙江省の天台山で修行して、お茶の種をもってきて日本全国に広げたことは有名です。彼は、「茶は養生の仙薬、延齢の好術である」とする、「喫茶養生記」を書いています。その後も、静岡に縁のある正一国師が、寧波にある天童寺や杭州の靈隠寺や径山寺で修行し、仏教文化や味噌醤油など食を含めてお茶を持ち帰りました。

それら古からのご縁があったからでしょう、1982年、当時の静岡県知事などが浙江省に出向き「お茶と温州ミカンが共通」と友好交流をすることになりました。来年は友好交流40周年を迎えます。

私は、1992年の友好提携10周年の年に浙江省杭州市を初めて訪問しましたが、それ以来何十回と行っています。その際に欠かさず訪問しているのが、西湖龍井茶の龍井村です。茶葉博物館や農家レストランが立ち並び観光地化してきましたが、農家の庭でそよ風に吹かれながら、野菜炒めと地鶏スープをいただき、龍井茶を飲んでみると、いつまでも佇んでいたくなる空間です。



浙江省千島湖の柴本茶園（抹茶用の茶葉生産）遠方は農家民宿

お茶は中国から日本にもたらされました。長いお茶の歴史の中で、中国から伝わった良さは保ちながら、生産や製法や飲み方まで、お茶は日本独自の進化発展を遂げてきました。

抹茶は、もともと中国から日本にやってきましたが、日本で茶道として現在まで引き継がれ「お茶を抹茶として飲む」ことが、中国国内で復活し今ブームになっています。日本から輸出された抹茶ですが、東日本大震災による福島第一原発の事故以降、放射能風評被害によって、いまだ日本から中国へのお茶輸出はできません。

そんな中で「では静岡のお茶農家が中国で日本茶を作ろう！」と、浙江省の千島湖畔で牧之原市の農家柴本さんが、お茶と観光施設をやっています。できた甜茶は、上海に運ばれて抹茶に仕上げられて販売されています。MIJBC (Made in Japan by China) ならぬ、MICBJ (Made in China by Japan) ですが、きっとどこかに静岡人の風味が加味された抹茶に仕上がっていることでしょう。

去年は世界中がコロナで震撼させられました。今年になって、ワクチンの接種が始まったとはいえ、中国など一部の国を除いて衰えは見ていません。

そんな中で、奈良県立医科大学微生物感染症学講座の矢野寿一教授らが「市販のお茶によって新型コロナウイルスを無害化させる効果を確認した」と発表しました。

実験では、試験管の中で新型コロナウイルスとお茶を混ぜて一定時間経過の後、ウイルスの状態を調べました。茶葉から煮だしたお茶、紅茶、ペットボトルのお茶2種で行いました。その結果、紅茶は99.99%、お茶は99.9%までウイルスが減少し、ペットボトルのお茶1種もウイルスを99%まで無害化させることが確認されたとのことでした。

人に効果があるかどうかは今後の研究を待たなければなりませんが、既にインフルエンザに対して、お茶の抗ウイルス作用は証明済みですから、今後の成果を期待したいと思います。



静岡牧之原の深蒸し緑茶（粉末部分があるので緑色が特徴）

人類は、お互いに協力してコミュニティーを形成し、成長してきました。今は社会がコロナによって分断されていますが、一方でデジタル化は一気にスピードを速め、離れた場所で会議ができるリモート社会は、働き方からビジネスの仕方や社会構造まで変革しようとしています。

それらを実現していくためには、お互いの信頼関係パートナーシップが欠かせません。信頼関係に立った協力し合う対話の場が必要ですが、対話の場には必ずおいしいお茶が振舞われています。素晴らしい対話の場には、話を活性化させる最高級のお茶が必要です。

日本の国会では議論の場にあるのは冷たいペットボトル茶ですが、中国では習近平国家主席が出席する会議から、どんな小さな行政の会議でも、熱くておいしいお茶がふるまわれます。

早くコロナが収束して、お茶を嗜好する共通の文化を大切にしながら、両国民があらゆる分野でお茶を楽しみながら対話が進むことを願っています。

深蒸し茶ができるまで ～牧之原台地～ - YouTube

<https://youtu.be/Ph95jQZo968>

文：西原茂樹, MIJBC 理事長